

イスラエルの人々⑱

□イスラエルの人々の信仰の手本（山上からイスラエルの宿営を見たバラムのことば）
なんとすばらしいことよ。ヤコブよ、あなたの天幕は。イスラエルよ、あなたの住まいは。それは、広がる谷のよう、また川のほとりの園のようだ。主が植えたアロエのよう、また水辺の杉の木のように。その手桶からは水があふれ、種は豊かな水に潤う。

（民24：5～7a）

□前回までの振り返り

1. 荒野の旅も40年目に入り、宿営地は再びカデシュ。メリバの水事件が起きた。この事件の中でモーセとアロンは主の命に従わなかったために、二人とも約束の地に入れなくなった。カデシュを旅立ち、ホル山に着いたとき、アロンが死んだ。
2. 前々回は、ホル山から旅立ったあとに起きた事件、燃える蛇事件であった。
 - (1) ホル山を旅立つと、エドムの地を迂回するため、南の紅海に向かう道を進んだ。再び約束の地から離れて行く。その途中で民の不満が爆発した。
 - (2) 不平を言った民に対して、神の罰が下った。「燃える蛇」と呼ばれる蛇の来襲であった。咬まれると、体中が燃えるように熱くなり死に至る毒を持つ、恐ろしい毒蛇だったようである。
 - (3) 民がモーセのところに来て助けを求めたので、モーセは民のために祈った。
 - (4) 主はモーセに、作り物の蛇を旗ざおの上に付けるように命じ、かまれた者がそれを仰ぎ見れば、死なずに「生きる」、と約束された。実際、かまれてから、それを仰ぎ見た者は生きた。
 - (5) 旗ざおの上に付けられた青銅の蛇は、十字架に付けられたイエスを予め示すモデルである。仰ぎ見れば、生きるという神の約束がそこにある。
3. 紅海にまで達すると、進路を北東に変え、エドムとモアブの領地を左に見ながら北上し、モアブの領地を過ぎたあたりで進路を西に変え、荒れ野を見下ろすピスガの頂、別名ネボ山に着いた。その荒れ野には「王の道」が通っていて、ヨルダン川に達し、ヨルダン川を渡れば、約束の地である。しかし、その荒れ野を領土とするアモリ人はイスラエルの通過を許さず、出兵してきたので、イスラエルはこれと戦い、勝利し、その地を占領した。（民21：10～35）
4. イスラエルは旅を続け、ヨルダン川の東、「モアブの草原」に宿営した。このとき、「バラムの事件」が起きた。モアブの王が呪術者バラムを招き、イスラエルを呪わせようとしたのである。前回は、モアブの王の招きを受けてバラムが出発するところまでを見た。今回は、バラムの事件の後半、主がバラムに呪いではなく、祝福のことばを語らせたという出来事である。

□イスラエルの人々^⑱ バラムの事件【後半】 民数記22～24章

7. モアブの王バラクが国境まで出向いてバラムを迎えた（民22：36～40）
8. バモテという岩山から、イスラエルを呪おうとして失敗（民22：41～23：12）
 - (1) 朝になると、王はモアブの長たちといっしょに、呪術者バラムを連れて、「バモテ」と呼ばれる岩山に上った。バモテとは高い所という意味である。そこからはイスラエルの宿営の一部を眺めることができた。どの程度の一部かという、後述の神託の中に「四分の一」とある。イスラエルの宿営は、幕屋を中心にして、東西南北に4つの宿営が設けられたので、おそらくその宿営の一つが見えたのであろう。
 - (2) バラムは、王に七つの祭壇を築かせ、七頭の雄牛と七匹の雄羊を用意させ、それぞれの祭壇の上で雄牛一頭と雄羊一匹を全焼のささげ物とした。
 - (3) バラムは王に言った。「あなたは、あなたの全焼のささげ物のそばに立っていてください。私は行ってきます。おそらく、主は私に会ってくださるでしょう。主が私にお示しになることを、あなたに知らせましょう。」
 - (4) バラムは王たちから離れ、岩山の山頂に行った。そこで、神がバラムに会われた。バラムは神に言った。「私は七つの祭壇を整え、それぞれの祭壇の上で雄牛一頭と雄羊一匹を献げました。」主はバラムの口にことばを置き、そして言われた。「バラクのところに帰って、こう言わなければならない。」
 - (5) バラムは、王とモアブの長たちのところに帰り、神から受けたことばを、彼の詩のことばにして告げた。要約すると、

「王の依頼で来たが、神が呪わないイスラエルに、だれが呪いをかけられよう。他の民族とは一線を画するイスラエル、できるものなら私もその一員になりたい」
 - (6) 王は驚いた。敵に呪いをかけてもらうためにバラムを連れてきたのに、逆に祝福するような内容だったからであった。王は、ただちに別の場所へ移動してあらためて呪いをかけてもらうこととした。
9. ピスガの頂から、呪おうとしてまたも失敗（民23：13～26）
 - (1) 王は、「ピスガの頂」に移動した。前と同様、七つの祭壇を築き、それぞれに雄牛一頭と雄羊一匹を献げた。バラムは、前と同様、王とモアブの長たちを祭壇のそばで待たせ、自分だけ離れた所に行った。前と同様、主がバラムに会い、その口にことばを置き、そして言われた。「バラクのところに帰って、こう告げなければならない。」
 - (2) 2回目の詩のことばを、要約すると、次のとおり。

「神の仰せは、必ず成る。見よ、神がイスラエルを祝福されたのだ、私はそれを

くつがえすことはできない。イスラエルの中には神がおられる。だから、だれもイスラエルを押しとどめることはできない。」

- (3) 王は途方にくれて「彼らに呪いをかけることも祝福することも、決してしないでください」と言ったものの、気を取り直して、もう一度、別の場所へバラムを連れていくこととした。

10. ペオルの頂上では、バラムの上に神の霊が臨んだ（民 23：27～24：25）

- (1) 王は、「ペオルの頂上」に移動した。前と同様、七つの祭壇を築き、それぞれに雄牛一頭と雄羊一匹を献げた。バラムは、前とは違い、自分だけ離れた所に行くことをしなかった。前の2回では、神から呪文を授かろうとして離れた所に行き、主は彼の口に祝福のことばを置いたわけであるが、今回、バラムは離れた所に行かなかった。その場で顔を荒野に向け、目を上げてイスラエルの宿営を見た。

民 24：1～2 バラムはイスラエルを祝福することが主の目にかなうのを見て、これまでのようにまじないを求めに行くことをせず、その顔を荒野に向けた。バラムが目を上げると、イスラエルがその部族ごとに宿っているのが見えた。

すると、神の霊が彼の上に臨んだ。

- 神の霊が彼の上に臨んだ・・・第三位格の神、聖霊なる神がバラムの上に臨み、神のことばを与えた。

- (2) バラムは神から受けたことばを次のように告げた。（詩の文体、反復が特徴）

民 24：3～7a バラムは彼の詩のことばを口にして言った。

「ペオルの子バラムの告げたことば。目の開かれた者の告げたことば。

神の御告げを聞く者、全能者の幻を見る者、

ひれ伏し、目の開かれた者の告げたことば。

なんとすばらしいことよ。

ヤコブよ、あなたの天幕は。イスラエルよ、あなたの住まいは。

それは、広がる谷のよう、また川のほとりの園のようだ。

主が植えたアロエのよう、また水辺の杉の木のように。

その手桶からは水があふれ、種は豊かな水に潤う。

- 谷、園、水、水・・・四つの用語はすべて複数形。イスラエルの宿営は、幕屋を中心に東西南北の四方に4つの宿営が設けられていた。幕屋から四方に豊かな水が流れ出し、四本の川筋となっていた。宿営はその川筋の谷のよう、川のほとりにある園のようであった。

民 24：7b～9 王はアガグよりも高くなり、王国は高く上げられる。

彼をエジプトから導き出された神は、彼にとっては野牛の角のようだ。

彼は自分の敵の国々を食い尽くし、彼らの骨をかみ碎き、矢をもって撃ち碎く。雄獅子のように、また雌獅子のように、彼は身を伏せ、横たわる。だれがこれを起こせるだろう。

あなたを祝福する者は祝福され、あなたをのろう者はのろわれる。

- 王はアガグよりも高くなり・・・アガグは、アマレク人の王位の呼称。アマレクはエサウの孫、エドムの地に住んでいた。その子孫がアマレク人。当時、アマレクは最強の国として知られていたが、イスラエルの王はアマレクの王よりも高くなるという預言（その成就是、Iサム15章、30章、IIサム8:12、I歴4:42~43）
- あなたを祝福する者は祝福され、あなたをのろう者はのろわれる・・・アブラハム契約の祝福の約束（創世記12:3）。イスラエルを祝福する者は、神によって祝福され、イスラエルを呪う者は神によって呪われる。

- (3) 王はこれを聞いて怒りを燃やし、手を打ち鳴らして言った。「私の敵に呪いをかけてもらうためにおまえを招いたのに、かえっておまえは三度までも彼らを祝福した。今、おまえは自分のところに引き下がれ。私は手厚くもてなすつもりだったが、主がもう、そのもてなしを拒まれたのだ。」
- (4) バラムは王に、「今、私は自分の民のところに帰ります。さあ、私は、この民が終わりの日にあなたの民に行おうとしていることについて、あなたに助言を与えます」と言って、モアブに対する神託を語った。その中にはメシア預言も。

民24:17 私には彼が見える。しかし今のことではない。私は彼を見つめる。しかし近くのことではない。ヤコブから一つの星が進み出る。イスラエルから一本の杖が起り、モアブのこめかみを、すべてのセツの子らの脳天を打ち碎く。

- 彼・・・近い将来に立つイスラエルの王、サウル王やダビデ王のことではない。メシアを指している。
- 一つの星、一本の杖・・・メシア出現の預言。「杖」は王権を意味する。イスラエルの王であるメシアが誕生するときに、特別な星が夜空に上るという預言である。バラムの後継者である「バビロンの知者たち」はこの預言を伝承し、東方の博士たち（マタイ2:1~12）につながっていく。

□本日の課題

バラムが、ペオルの頂上からイスラエルの宿営を眺めたとき、宿営全体はどういう形に見えたでしょうか？ 次の3つの中から、選んでください。

